

城山三郎

黄金の
日日



城山三郎

新潮社

黄金の日日



黄金おうごんの日ひ日び

昭和五十三年一月五日発行
昭和五十三年二月十一日八刷

定価九八〇円

著者 城山三郎しろやま さぶろう

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話業務部(〇三)二六六一五二二
編集部(〇三)二六六一五四一一
振替東京四一八〇八番
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社
通信係宛御送付下さい。送料小社負
担にてお取替えいたします。

印刷・東洋印刷株式会社

製本・新宿加藤製本株式会社

© Saburō Shiroyama 1978 Printed in Japan

長編小説

黄金の日

目次

一章	雄々しき人々……………	7
二章	満山焼き払い……………	37
三章	名物狩り……………	66
四章	死に一倍……………	94
五章	中国大返し……………	120

第六章 第二の堺……………145

第七章 住てわたらん……………175

第八章 絢爛たる屋敷……………210

第九章 天下分け目……………236

第十章 マニラの客……………253

装画「堺大絵図」前田書店刊
装幀 荒田 秀也

黄金の日日

一章 雄々しき人々

永禄十一年十月。摂津と和泉の国境に在る堺の町は、織田信長の軍勢によって包囲された。海に向かつて開いた町は、残り三方に深い堀をめぐらしている。信長の軍は、鉄砲を撃ちこまれるのを警戒してであらう、その堀より少し退いたところに布陣し、夜にはいくつも篝火の炎を上げていた。

堀の暗い水面には、篝火の灯影はほとんど届かず、中天にかかる半月の影だけが、無心に浮かんでいる。

町の防備は、嚴重であつた。堀を渡る橋には頑丈な木戸があり、堀沿いには、延々と土塁が続く。二町おきぐらに見張りの櫓も急造されて、人影が堀の外をにらんでいた。土塁ぎわには、鉄砲や弓矢を構えたかなりの人数が、いくつか黒々としたかたまりになって、はりついている。冷えこんだ夜の空気には、殺氣がみなぎっていた。

町の中へ入ると、早々に雨戸を締めている家が多いが、それでも、町の中央、東西に走る湯屋町かいわいに来ると、灯影が漏れ、琉球渡来の三味線の音が聞えて来たりする。

町の周囲の緊迫した空気とはちぐはぐだが、そのちぐはぐなものが、町会所の寺院風の大きな建物の中で、はげしい議論となつて、ぶつかり合っていた。

美濃から上洛してきた織田信長なる武将が、いきなり堺に二万貫の矢銭（軍用金）を課してき

た。応じないでいると、軍勢をさし向けてきた。一戦覚悟であくまで拒否するか、それとも、折れて矢銭を出すか。

堺を支配する会合衆三十六人の中で、意見は真二つに分れた。

二万貫といえ、大金である。遣明船一隻の運航費が約千五百貫であるから、十隻あまりの船を明国へ往復させることができる。

ただ、堺の町の資力からすれば、払えぬ金ではない。

遣明船のための勘合符をもらう請負代が二千貫といわれたころ、堺は三千貫で請負い、さらに四千貫まではずんだ。足利の公方たちは、こうした金で金閣や銀閣を建てたというのが、それだけの金を払っても、なお堺はもうけを上げた。日本から銅を持って行って売り、生糸を買って帰ると、二十五倍の値段になったりした。生糸は極端な例だとしても、遣明船はふつう一万貫程度の荷を積んで行き、三、四倍の利益を上げた。もともと、難破したり、海賊に襲われて、元も子も失くすことも計算に入れる必要はあるが……。

いずれにせよ、堺にとっての二万貫。大金だが、無理をすれば、ひねり出せる。その辺のところを、たくみに衝いてふっかけてきた金額であった。

それだけに、会合衆には、いまいましくもあり、また議論がまとまらぬ結果になった。

「信長は、これまでのひとちがいます。こわいひとです。新しいひとです。利口なくせに無茶ができます。これまでのように、まわりを見ながら何かやる、というひとではない。突き進んできます」

今井宗久は、幾度となく同じ文句をくり返していた。二万貫を出そうという妥協派である。「近江源氏の血をひくというのに、弱気なことを」

茶友達である天王寺屋宗及あたりにからかわれても、同じ言葉をくり返した。

宗久は、近江高島から亡命してきた侍の子で、堺に出て、皮革・鉄砲などを扱って成功した新

興商人であつた。茶湯にも明るく、武野紹鷗じやうおうの女婿むすめに迎えられたほどだが、豪商としてはまだ発言に重みがない。むきになっていえば、いよいよ座の空氣から浮く結果になつた。

議論を牛耳ぎゅうじつてゐるのは、紅屋・能登屋のどなど屈指の豪商たちの唱える「信長何するものぞ」という強硬論であつた。

戦乱続きの世というのに、この町だけが、二百五十年近く、兵火を知らない。平和に狎なれてゐた。

牢人ろうじんたちを集め、若衆を武装させ、雑賀さいがからは鉄砲の名手をひきぬくなど、町にそれなりの兵力を持つてゐるということもある。

だが、それ以上に大きいのは、永年培つてきた町の経済力・政治力であつた。黄金の力が、武將たちに一目置かせてきた。

諸侯にとつて、堺はかけがえない物資の調達先であり、ときに軍資金の借用先でもあつた。蹂躪じゆうりふするより、友好を求めた。

堺としても、表向きは局外中立を貫き、どの政治勢力にも積極的に加担しないことを建前にした。このため、軍隊の市中通行は認めても、数多い寺院を使つての市内での宿泊は許さぬしきたりであつた。

堺は、さらに進んで、武將たちの争いの調停者になり、諸侯を手玉にとることさえあつた。

二年前、松永久秀ひさひでが堺に逃げこみ、追撃してきた三好勢との間に戦鬪が開かれようとしたとき、会合衆が両者に働きかけ、それぞれに応分の金を与えたあげく、優勢な三好勢が勝つたことにし、高らかに勝鬪かちどくの声だけ上げさせて、引き揚げさせた――。

堺とは、そういう町である。田舎出いなかの一武將が、縁もゆかりもないのに、いきなり大金を巻き上げられるような町ではない。

「堺を見そこなうな」というのが、強硬派の意見である。

今井宗久は反論した。

「縁もゆかりもないわけではありません。信長は堺の代官職を求めています。他のどの恩賞にも目もくれず、堺の名をあげたというのは、堺へのひたむきな執念、信長というひとの新しさおそろしさのあらわれではありませんか」

上洛して足利義昭を將軍にした信長に、義昭は褒賞として、副將軍か管領の地位、あるいは、近江・山城・摂津・和泉・河内の五ヶ国で領地をふやさせようといったのに対し、信長は、堺・大津・草津の三ヶ所に代官を置くことだけを望んだ。

つまり、信長は、これまでの諸侯のように、成り行きや事のついでに、堺に大金をふっかけてきたのではない。堺そのものに、はじめから照準を当ててきている。

宗久の熱弁に、強硬論者はいい返す。

「それほど堺を望むなら、然るべく敬意を払うべきだ。いきなり頭ごなしに大金を出せとは、何事であるか。堺衆の誇りにかけて許すわけには行かない」

うなづく顔が多い。

会合衆の中には、倉庫業を意味する「納屋」を名のったり、屋号とする者が、幾人もいる。新興の今井宗久もそうだが、その茶湯仲間である千利休も、納屋を名のる。その納屋こと千利休は、判断がつきかねて、黙りこんだままである。黙っていることは、大勢に加担することであった。

「信長のことをよく知らぬと、とり返しのかねことになります」

宗久は、悲鳴のような声を上げ続けた。そして、ときどき落着きを失くした様子で町会所の入口を見る。

「おびえることはない。ここは堺だ。堺は格別の町なんだ」

天王寺屋が、また冷ややかにいう。

宗久は下唇を噛んだ。おびえているのではない。宗久は報せを待っていた。信長についての少

しでも新しい報せ、みなを恐れさせる報せを。

町会所のすぐ先、湯屋町と市町の角に、番所があった。

ふだんは腕の立つ番人たちが詰めて居るが、いまは前線に出て、代りに、身なりもまぢまち、少し異形の若者たち数人がたむろしていた。

彼等も報せを待っていた。いや、正確には、報せを持った一人の仲間の帰りを待っていた。

「おそいな。五右衛門のやつ、織田の軍勢にとっつかまったのかな」

「あのどじめ。また南蛮酒に手でも出したのでは」

「田舎者の軍勢に、そんな酒があるものか」

「わからぬ。信長は、なかなかの南蛮好みというからな」

「しかし、腰の抜けるまでのめば、見つかったとき首がとぶ。今井家で盗み酒するのとはちがうからな」

仲間たちのその声に、今井宗薫はにがい顔でそっぽを向いた。

父親の宗久に似て、色白でよく動く目、大きな福耳。女のようなおちよほ口だが、利かぬ氣を見せて、そのうすい唇を強く結んでいる。恰幅もよく、あと一回り肉をつけ、髪を銀色にすれば、そのまま宗久になってしまう。

その宗薫が今井家の惣領息子なら、宗薫の隣りに居る助左衛門は、今井家に拾われて育った小僧の身である。骨組のがっしりした男で、眉が濃い。笑顔はさわやかだが、その話題には、閉口した表情でもある。

一月ほど前の夜ふけのことである。今井家の奥の客間に忍びこんだ石川五右衛門が、ギヤマン壺に入っていた葡萄酒を盗みのみした。

次の間にいつも宿直代りに寝ていた助左衛門が目をさましたときには、五右衛門はすっかり酔

いが回って、動けなくなっていた。

赤い顔をして両手を泳がすだけの五右衛門を見て、助左衛門は怒るよりも、笑い出した。それに、南蛮酒がうまいと吹聴していた手前、助左衛門にも責任がある。

「どじな泥棒め」

と、耳に口つけて叱りながら、五右衛門をひきずるようにして廊下から庭へ逃がそうとしたとき、やはり目をさましてやってきた宗薫に見つかった。

とっさに、助左衛門は、五右衛門をかばい、嘘をついた。

「わたしが、こっそりひき入れて、のませました。いかようにも、お仕置きを」

番所に引き渡され、月番の会合衆の手で裁かれる。あるいは、暇^{ひま}を出されるのも覚悟したのだが、宗薫はよく動く目で二人を見改めたあと、

「そうかい。ずいぶん、にがい酒だったろうな」

とだけいって、姿を消した。

この件について、宗薫も助左衛門も一切口外しなかったのだが、当の五右衛門がしゃべって仲間に漏れた。盗っ人を見逃したとあっては、助左衛門はもちろん、宗薫の立場もなくなるのだが、その辺までは頭の回らぬ五右衛門であった。

ふいに軽やかな鐘の音が聞えた。

若者たちは、いっせいにその方角を見た。二つほどの灯影が、空に漂うようにまたたいている。

同じ市町の道ひとつ隔てたところに、日比屋了慶の三階建ての大きな家がある。海賊と戦うため三百人の武装兵を持つような豪商だが、その三階を天主堂に供していた。京都を追われたポルトガル人宣教師たちが居ついて、すでに四年あまりになる。

「切支丹^{キリシタン}は、こんな夜までおつとめをしているのか」

かぶき者仲間の中でも格別目立つ僧形の善住坊が、大きな目をつり上げていった。雑賀鉄砲衆からの流れ者で、若いが、狙撃にかけては名手である。話の合い間も、手は鉄砲の銃身をみがき続ける。

「美緒から聞いたが、今夜は、町の安泰を祈る特別の弥撒があるそうだ」
いいながら、宗薫は腰を浮かせた。

「おれは帰る。五右衛門はあてにならぬ。あいつの持つてくる報せなんて、知れたものだ」
つぶやいたあと、助左衛門に向かい、

「もし、あいつが帰ったら、ともかく父のところへ連れて行け」

宗薫が立ち去るのとは同時に、日比屋の表戸が開いて、三十人ほどの男女が出てきた。宣教師であろう、長身の男にあいさつしながら散って行く。

その中に、黒い布で半ば顔をかくし、侍女を伴に、小走りに消える美しい娘があった。今井宗久の後妻の連れ子、美緒である。父親は堺に逃げのびた公家の一人だという。

「宗薫め、同じ家に居ながら、また顔が見たくて帰ったのか」

若者仲間ではずばぬけて年長というか、一人だけ壮年の山上宗二が、にがにがしそうにつぶやいた。「平家蟹」のあだ名のある角ばったいかつい顔。仲間のうちでは、いつもいちばん辛辣な口をきく。大店の若旦那だが、利休について茶に親しみ、店のことはふり向きもしない。

「仕様があるまい。今井の家では、行く行くは二人を夫婦にする、というもの」
鉄砲をみがきながら善住坊がいったとたん、助左衛門が大声を出した。

「そんなこと、きまっているものか」

「なんだ、助左、おまえも……」

「おれだけじゃない。五右衛門だって」

山上が、鼻先で笑っている。

「堺の若衆は、みんな惚^ほれてゐるのさ」

そうした話題から逃げ出すように、助左衛門は鉄砲をとり上げ、肩に当てた。善住坊について使^{つか}ひ方は習^しっている。これはと思うものについては、格別の勉強をする助左衛門である。

鋭く狙^{ねら}いをつけたつもりでいると、また山上に冷やかされた。

「目つきがちがうな。おぬしのは、さて当るかどうか、という目。善住坊のは、撃ち殺して見せるといふ目だ。善住坊がそいつを構^{かま}えると、とたんに死人^{しにん}のにおいが漂^よってくる」

ふいに、その言葉を受けて、黒い影が舞いこんできた。

「死人^{しにん}のにおいは、つい、そこまで来^きている」

石川五右衛門であつた。

助左衛門は、すぐ五右衛門を連れて町会所へ行き、今井宗久に報告させた。

駿足の五右衛門は、ふだんは、豪商の飛脚代りや使い走りをしてゐるが、もともと伊賀衆にながりのあるところから、情報を集めて回^{まわ}る才能もあつた。

ただ、この夜五右衛門のもたらした情報には、五右衛門自身では、これだと思うものはなかつた。

信長の軍隊はかなりの人数で堺を包囲し、なお、後詰めの軍が続いてゐる。信長そのひとは、摂津芥川^{かきがわ}城に入^いつて、一服。芥川城を預かるのは、和田惟政^{ただまさ}麾下^{ひかり}の高山飛騨守^{ひだりもり}・右近の父子である。

信長は、堺の他に、石山本願寺へ五千貫、大和法隆寺に一千貫を課^かしていたが、その両寺とも、信長の要求に従^{したが}つて、制札^{せいさ}銭代^{せんしろ}りに納めることにした、という。事実、法隆寺からは、その金^{かね}をつくるためであらう、堺へ大量の米を売りにきていた。

京都では、大どころの社寺のいくつかが、別に信長にいわれたわけでもないのに、あわてて制